



機関紙

一水会

No.7
『冬号』

発行日/2016年12月1日
発行人/小川 游
編集責任者/さきやあきら
発行/一水会事務局
〒330-0074
埼玉県さいたま市浦和区
北浦和5-3-3 B-108
山本耕造方
Tel.048(816)8805
http://www.issuikai.org/
題字/有島 生馬

巻頭言

『第78回展授賞式・懇親会』における代表挨拶より

一水会は昭和十一年にスタートしてちょうど八十歳ですが、展覧会の回数は78回展ということ。第51回展で大改革があり、それを決断してやっつて下さったのは高田誠先生です。

半世紀の間に会員数が肥大化して、無鑑査が陳列総数の七割以上を占めるという危機を迎えたわけです。私どもはその後を受けて初めて規約を拵え、今にして思えば、かなり厳しすぎるルールをひき、無鑑査が再び溢れてしまわないような道筋を付けることをやりました。

あれから二八年、今年「準会員」を設けましたが、それでも無鑑査は総陳列数の三割ちょっと。組織の形が守られていくという見通しの中での決断でした。あの大改革を更らせるために、自分たちは全てを捧げて来たように思います。そして今、それをほぼやり終えたような達成感と、疲れを若干感じています。近い将来は思い切つて若い人達に、一水会を更

に良い会に、新しい時代にも取り残されない会にしていきたいと思います。幸いなことに良いメンバーが会を支えてくれており、広報部も『機関紙一水会』を出して精力的に活動しています。支部活動も、関西、北陸、中部、北は北海道から南は四国まで勃々として湧き上がり、若い人達の努力が実つて来ております。

パラリンピック、毎日観ました。選手の顔が明るい！人間って凄い、負けていけない、私どもも制作でくたびれたような顔はできない。皆さん！ひとつ頑張りましょう。これからの一水会、みんなの力でいい会にして下さい、お願いします！

二〇一六年九月二二日

小川 游



「乾燥花」 変8 油彩

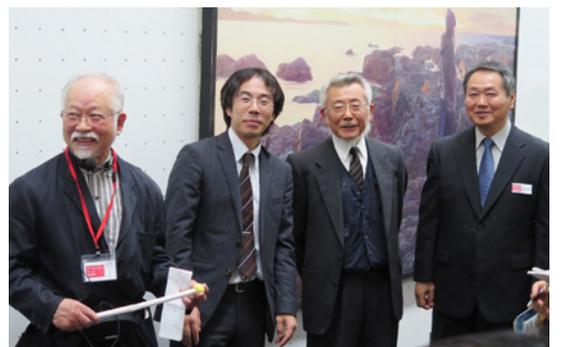
公募団体ベストセレクション美術2016



五月四〜二七日、東京都美術館にて二七の主要美術団体の作品が展示されました。一水会からは田島健次、山名将夫、保坂晶、伊藤尚尋の四氏が出品しました。恒例のアーティストトークは田島先生が担当され、展覧会初日に詰めかけた二〇〇人を超える聴衆を前に熱のこもったトークを展開されました。

「時々「一水会調」と言う、やや批判的な声を耳にすることがあります。しかし我々は写実すなわち本当の意味でのクラシシズムを指しているのです。形式にとらわれないで自由を主張しながら普遍性のある傑出した第一級の作品の制作を目指しているのです。クラシックを「古典」と訳すので古いと云うイメージを招きますが、ベートーベンやモーツァルトなどの音楽は何度聴いても決して古いとは思わないでしょう。

今回出品作の制作動機ですが、私は四十年前からインドへ旅行しながら現地の人物や牛を主なモチーフにしていきます。ある時デカン高原の洞穴に入り絵画空間というものの謎について考えてみたことがありますが、そして一年程前に京都で遊ぶ機会があり、路地裏を歩きながら千年という



左から田島、伊藤、山名、保坂の各氏

歴史の流れを肌を感じていました。その時、絵画という、三次元の世界を平面上置き換える仕事の中で、この悠久の時間空間を構図の道具に使ってみようと考えました。前景の岩は一万二千年前の石器時代の住居跡です。遠景の構造物は二千年五百年前の仏教発祥の遺跡です。100号キャンバスを二枚連結させるため中心に線が残るので、それを奥行きのある構図に利用しました。

出来上がつてみて、どこかで見たとような気がしていたら『富嶽三十六景』の構図がよぎりました。」

以上、田島先生談抜粋
(加曾利光男記)

特集

第78回一水会展

展評



山本 勇

今年の一水会展。「会場は上質の緊張感に包まれていたよ」と友人より評価を受けた。精魂こめた作品が全室にわたって展示され多くの鑑賞者に満足感を与えたと思う。また、「一水会は変わってきたね」ときく機会が多くなってきている。写実を本道とし、更に「二十一世紀に於ける選択」。この方針を指標とした作品が台頭してきているように思える。

受賞作品の「紡ぐ」木村毅氏、「卓上風景」土田佳代子氏、「印象沖繩・2016Ⅱ」山崎保氏、いずれの作品も「クオリティー」「オリジナリティー」「コンテンツポラリ」を備えた素晴らしい世界を築き上げてきている。制作では容易に潮流に乗るのではなく、「自分の世界」「自分の画面」をじっくりと極める必要がある。そのためには会場で運営委員を始めとする「先達」の作品に学ぶことは必要だと思う。これらの作品は対峙すると語りかけてくるようだ。詩情ただよう作品。作者の心が伝わる作品。視点が独創的な作品。数々の作品に出遇ったが特に小沼秀夫氏、齋藤由美子氏、加曾利光男氏、茶本良隆氏、高橋康夫氏、青木年広氏、山下審也氏、岩池和代氏、久保慶議氏、保坂晶氏、中



聖地巡礼 山本 勇

なく、「自分の世界」「自分の画面」をじっくりと極める必要がある。そのためには会場で運営委員を始めとする「先達」の作品に学ぶことは必要だと思う。これらの作品は対峙すると語りかけてくるようだ。詩情ただよう作品。作者の心が伝わる作品。視点が独創的な作品。数々の作品に出遇ったが特に小沼秀夫氏、齋藤由美子氏、加曾利光男氏、茶本良隆氏、高橋康夫氏、青木年広氏、山下審也氏、岩池和代氏、久保慶議氏、保坂晶氏、中

村裕二氏、中田基宏氏、浅野和喜氏、吉田穂重氏、中山二昭氏の作品が心に残った。そして、今年50号サイズの作品にも力作が目立った。このサイズの作品は今後、審査、展示に於いて分け隔ての無い形が検討されている。そして、79回展より長年の希望が通りロビー階全室展示となる。『過密な展示』は改善され、多くの作品が更に輝きを増すことだろう。

新会員紹介

飯塚和秀さん(茨城)

才村啓さん(大阪)

中村哲泰さん(北海道)



鍵岡太美子さん(奈良)

高橋よう子さん(埼玉)

服部三郎さん(神奈川)



川村のり子さん(愛知)

田中敏雄さん(徳島)

増尾邦治さん(長野)



北村春美さん(愛知)

戸田英彰さん(東京)

増田綾子さん(奈良)



木村吉和さん(石川)

中原勇さん(鳥取)

渡邊道男さん(栃木)





一水会優賞
卓上風景 土田 佳代子



文部科学大臣賞
紡ぐ 木村 毅

受賞のことば

文部科学大臣賞

この度は、身に余る栄誉をいただき、ありがとうございます。最近



木村 毅さん
(広島)

は、この作品のように、平和、ヒロシマをテーマにして描いていますが、いわゆる反戦、平和を訴えるといったものではない、私的な願い、迷いや不安というものを表したいと思っています。

一水会優賞

初入選から35年。無我夢中でした。室内の情景をテーマに、奥行きのある画面構成に取り組んできました。振り返れば未消化に終わった作品もあり、じつりと向き合つことが大切と痛感しています。その先に、気持ちのよい作品が出来ることを信じて、これからも励んでいきたいと思



土田 佳代子さん
(石川)

す。ありがとうございます。

一水会賞

この度、大きな賞を賜り感謝の念にたえません。ありがとうございます。



山崎 保さん
(三重)

した。沖縄を描き始めて八年になります。琉球石灰岩の石垣と、シーサーの組み合わせが面白く、描く動機になりました。スケッチと写真をもとに、何枚も下図を描き構図を決め大作に挑んでいます。沖縄文化を肌と感じ「ヘタでいい、ヘタがいい、我流が一流」をモットーにこれからも精進してまいります。

東京都知事賞

紀伊半島の南端、夏山海岸で朝日を浴びた人物を描きました。到着



伊藤 尚尋さん
(大阪)

はAM四時頃、空が白むと共に胸が高鳴ります。画面が見える程度になると形をとってご来光を待つ。逆光の中眩しさに負けず描いて描いて描く。エスキースの完成。漁港で仕事を終えた漁師さんに混じって朝の定食。至福。

損保ジャパン日本興亜美術財団賞

慌ただしい現代社会の中で、ひと時の安らぎを感じて戴きたいとの



田中 久美子さん
(神奈川)

想いから、休息をテーマに眠る人や新聞を読む人の日常風景を描いて参りました。これまでご指導戴いた先生方に感謝を申し上げますと共に、なお一層の研鑽を積んで参ります。ありがとうございます。



麦の色わずかに青し 小川 游



一水会賞
印象沖縄・2016Ⅱ 山崎 保



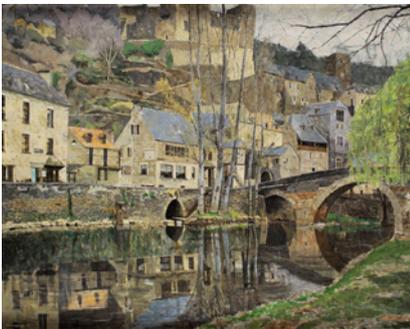
波状雲 久保田 辰男



損保ジャパン日本興亜美術財団賞
休日 田中 久実子



白い卓上 田中 義昭



川沿いの街(フランス) 川本 幸子



リボンを結ぶえりかちゃん
寺井 重三(遺作)



庭前 佐藤 道雄



石井柏亭奨励賞
雪の朝 吉田 穂重



安井曾太郎奨励賞
夢想 中田 基宏



東京都知事賞
夜明けの海 伊藤 尚尋



木下孝則奨励賞
春を待つ雪田 中山 一昭



有島生馬奨励賞
残されたもの 城 真知子



山下新太郎奨励賞
明日へ 広川 明人



木下義謙奨励賞
晩夏 金泉 陽子



小山敬三奨励賞
採鉱の譜 浅野 和喜



碓伊之助奨励賞
薪ストーブのある部屋 大野 文子

- | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|----------------------|--|---|---------------------|-----------------------|---------------------------------|---|-----------------------------|--|---|---|
| ◎ 文部科学大臣賞
木村 毅(広島) | ◎ 一水会 優賞
土田佳代子(石川) | ◎ 会員佳作賞
橋本 満弘(山形) | ◎ 会員努力賞(委員推挙)
青木 年広(岐阜)
飯田さち子(神奈川)
加曾利光男(神奈川)
高橋 康夫(北海道)
外処 旭(群馬)
村上 選(広島) | ◎ 準会員賞(会員推挙)
鍵岡太美子(奈良)
田中 敏雄(徳島)
服部 三郎(神奈川)
渡邊 道男(栃木) | ◎ 一水会 賞
山崎 保(三重) | ◎ 東京都知事賞
伊藤 尚尋(大阪) | ◎ 損保ジャパン日本興亜美術財団賞
田中久実子(神奈川) | ◎ 奨励賞
安井曾太郎奨励賞
中田 基宏(石川)
山下新太郎奨励賞
広川 明人(新潟)
木下孝則奨励賞
中山 一昭(石川)
小山敬三奨励賞
浅野 和喜(石川)
新 人 賞
田村 公男(三重)
日 美 賞
飯野 浩史(埼玉)
一般佳作賞
浅井美智子(埼玉)
岡 愛子(埼玉)
宮崎 貴至(奈良)
弓手 文乃(奈良) | ◎ 委員推挙
小沼 秀夫、斎藤由美子(以上二名) | ◎ 会員推挙
飯塚 和秀、川村のり子、才村 啓、高橋よう子、中村 哲泰(以上五名) | ◎ 準会員推挙
加地 求、菊地 紀男、北 清志、北 眞佐男、木村 忠史、小松 正弘、下川 昭一、須貝 昌春、菅沼 正則、鈴木 勁介、春原希佐幸、武田 道弘、田中 成利、田中 昭一、谷野 優子、成澤 長谷、原島 達明、日向野 惇、平本 正行、深谷 恒雄、藤井あけみ、細貝 信子、松田 寧子、松本 常雄、松本 光久、真弓 俊郎、水谷 香織、宮城 静子、村上 千晶、森本 光英、安井 啓二(以上三九名) | ◎ 会友推挙
赤川 光石、阿部 一郎、井口 海治、石鍋 敏子、石割 峯市、板倉 慶隆、井上 徹、今井 博子、上岡すづ子、上東 純子、大井みどり、大江 純子、大嶋 尚美、荻原 輝昭、海部 洋、片貝進二郎、加藤 善昭、金子 康子、亀川 裕子、加良 章、菊池 郁子、小島 嘉彦、北野 祥子、久保多貞夫、久松 高志、近藤 幸子、栗原 登、齊藤 忠臣、笹鹿 和昭、佐々木義興、佐藤 明、嶋崎 愛三、島本 雅子、杉岡富士子、鈴木 佳代、曾我 清臣、高木 節子、谷上 勝利、近越 一女、辻 齊一、飛田 秀子、豊田 幾代、豊田 満春、中居昭二郎、中江左知代、橋場 房子、島山 正枝、前田 民義、松井貴美恵、松浦 久徳、松田千鶴子、光安 陽子、宮島百合子、村元 道男、室家 邦久、森本 正治、山崎 成子、山下 芳内、昭美、渡邊百合子(以上六六名) |
|-----------------------|-----------------------|----------------------|--|---|---------------------|-----------------------|---------------------------------|---|-----------------------------|--|---|---|

入賞者

第1回座談会

私が一水会に 決めたわけ

初めての座談会です。
今回は、お呼びした一人ひとりのフリートークング、
会に寄せる皆さんの『想い』が飛び交いました。

2016年3月15日 中央区京橋区民館

広報部

さきやあきら
新井 隆 (司会進行)
西 真里子 (写真)
加曾利光男 (録音)

参加者

市川 広美 (長野)
近藤 孝子 (愛知)
才村 啓 (大阪)
畠山 正枝 (広島)
山本 耕造 (埼玉)
弓手 研平 (奈良)

さきや このたびは委員、会員、
新人、幅広くお呼びしました。
皆さん自由に喋ってください。
新井 僕が一水会選んだのは、
三十七の頃かな？一水会の創立
会員たちの仕事、その人たちが
掲げたマニフェストと、自分
が教えてもらった事などがうま
く重なって応募したら、いきな
り特別賞っていうのを貰って。
それで、なんとまあ公平な団体
だろうかと…
さきや 僕は50回記念展から。
僕は単純なので、公募展は生臭
いものと決め付けてとても嫌で
した…。でも、一水会の古い先
生との偶然の出会いがあったん
です。大変高潔な方でね、彼に
「ドブに落ちた奴を見て汚いって

言うのは簡単だけど、お前落っ

こちてキレイで居られるか？」

といわれてね。じゃあ、そこに

入ってみるか、それが私の始ま

りです、ばかに単純です。長い

間にたくさんの先生方とのご縁

や、強い友情を感じる人達もで

きて一水会での活動が続いてい

ます。

弓手 僕は十九歳になってすぐ

に一水会に出したんです。吉本義

夫先生が高校の美術の先生だっ



弓手 研平氏

山本 私は55回展から。
教員生活やってるうち

たというそれだけなんです。

大学は大阪芸大、才村君と同じ

なんですけど、大阪芸大は、当

時は「具体美術協会」。具体は関

西できて、型にはまったもの

は大嫌いという、完全に一水会

とは正反対なんです。具象なん

て消えそうな状態で、正反対の

授業を受けながら一水会に出す

というスタイル…(えらい団体に

入ってしようたな)と思いが

ら、最初はタイピングを見て辞

めようと思ってきました。

ど、五年も経つうち、大

学の考え方もどこか違う

んじゃないかって思い始

めた。

に、小川先生から一水会

出してみたいなかという誘

いがあったんですよ。こ

れもご縁かなあ！って。

入って、けた違いに多く

の人に自分の作品を見て

もらえる。それが良かった

と思うし、いずれは好き勝手

なことやろうと。もし、それで

受け入れて頂けないなら、それ

はそのとき考えればいい、なん

て軽い気持ちでやってきたん

ですけど、何となく、ここに至り

ました。

新井 畠山さんは去年初めて？

かなりキャリアは積んでおられ

たんですよね。

畠山 大学の時に少し。卒業し

てちよつと止めたんです。で、四

十位からまたボチボチ描くよう

になりました。裸婦のデッサン

会に通ってた。一水の方たち

のスケッチ会に誘われました。

久保田辰男先生主催で、凄く楽

しかったです。こんな会がある

んだって、入らせてもらって

感謝しています。学生の頃は他

の会に出してましたけど、続か

なかったですね。

才村 僕は弓手先生とか池田清

明先生とか周りに大阪芸大出身

で一水会に出されてる方が多く



山本 耕造氏

です。お金とか大変なんですけ

ど、年一回発表の機会がない

と、大きな100号を全力で描

くのはなかなか難しいと思いま

す。一水会はデッサンが基本の

会だと思ってまして、モノを見

てそこから作品を展開してゆく

仕事、それを評価して頂ける会

だというのも出品理由のひとつ

です。

弓手 大阪芸大、何百人もいる

美術学科の何十年も続く中での

私達六人、ごく少数派です。

市川 父が一水会で長かったん

です。ずっと父を見てたんです

が、父はガンガン絵を描いていま

した。出品画を描く時期になる

と、ほんとにピリピリして、出さ

なきゃいけないその前日、朝まで

描いていて、結局全部削って、お

酒は飲めないんだけど、わあーっ

てウイスキーをがぶ飲みして救急

車まで運ばれた事件があって、それ

を見て泣きながら私は中学校に

行くなんてことだったんです。そ



近藤 孝子氏

時を経て生き続けるものをずっと大事にしてるって発信できたなら、日本が奈良や京都を絶対壊

んだけど、心のどっかで、きつと私も絵を描くんだろうな、なんて思っていました。中谷龍一先生の別荘が軽井沢にあって、父が絵を持っていくことがあって(子供の)私もついて行って晩ご飯ご馳走になったりして、自然な流れで一水会に出すようになりました。山本 高校の時に、勉強の合間に癒しを求めて絵でも描こうかぐらいに、軽い気持ちで美術の部活に入ったら、みんなが石膏像睨んで、ちよつとでも友達と話そうもんなら、しつ！つて。あれー！イメージ違うじゃねえかって。だけどやっぱりデッサンとか油絵とか描いてた。当時尊敬してた私の先生が抽象画描いてたせいか、具象描いても、他の仕事が気になる。いろんな表現に惹きつけられる自分があってもいいんじゃないかなって思ったりしてるんですね。市川 私は、自分がこうしたいんだってことがなかなか決まらなかったですね。でもある時、

世の中に同じ絵は要らないんだって思ってたからいい感じではないかなって思ってたんだけど…。近藤 私、板前してたので、絵を描く世界とは全然違っていて、「自分」というものを持ってはいけない。いまそこにある素材を最大限活かすためには自分が何も持たず静かな心になった時に初めて向こうから伝わってくる。ずっと自分を殺すことだけに徹してきて、いいモノが見えなくなってしまう時に、料理長に「絵の方もういっぺん始めてみたら」と言われて描き始めて中部一水会に出したら賞を頂いて。自分の意見をこんなに素直に言う人達がたくさんおるんや、自分を曝け出していいんやって、教えてもらった…。弓手 奈良にずっと住んでいまから一四〇〇年ぐらい昔からあるモノが身近にあたりまえのようにあって、その一方で前衛的な、ぶつとんだ大阪芸大。その両極端の環境にいるっていうことがちよつと心地良か



してはいけないと思うような、そういう部分につながるんじゃないかなと。才村 一水会が大切にしているものって、デッサンだと思ってる。僕は実際に目の前にモノがないと大作を描くエネルギーが生まれてこないの、常にモノを見て描く。それを大切にしようとする。さきや 先輩との付き合いの中で感じたりすることはあるかなあ？才村 割と紳士的な人が多いですね。一水会は穏やかな、画風と一緒。新井 モノを見て、景色を見て「美しい、それを自分で表現したい」と思うと、力も手順もいる、技術もいる。謙虚にしないでできないんですよ。市川 一枚の絵を作るのに結論を早く出してしまわないところがあるかな…そこへ行くのに紆余曲折して苦しいんですけど達成感がある。さきや うん、そうだね。みなさんが遠回りしてでも頑張ってるって描いて出す一水会だけど、気になることがあったら聞かせてください。山本 一水会は、一般の人達がいっていきやすい。親しみを持ちやすい。そういう良さは大事にしたいと思う。だけど、似たような絵がズラッと並ぶってのはどうかな？もう少し表現の幅があると、更に会も発展していけるんじゃないかな。弓手 僕もそれは毎年必ず感じる。公募団体の審査のシステムから、前に評価された絵を出しておけばとりあえず安心だという心理を出品者に働かせるって

いうことがあるんだろうと思います。「もうちよつと新鮮なことをやりたい！」という思いを閉じてしまっているってのはあると思う。さきや 僕も感じます。長い間、風景を描いてた人が人物を出してきた、それは面白い。けど、やはり安定した方に手が上がってしまう。本人はこっちに行きたいなって思いで話してるんだけど、期待に副う答えを出してあげられないんですね。山本 ものすごく難しいんだけど、そこは大事なとこだと思うね。さきや 審査員が三十数名いるんだけど、その人達に三十数通りの見方があると思う。その見方を尊重しながら多数決で。審査では千点くらい出てくるから、パッと見て惹かれるものに手を挙げるっていう先生もいるし、構図や色使いなどに重きを置く先生もいる。そのバランスの中で総合的な審査の結果が出る。



市川 広美氏

弓手 組織っていう点で言う

と、地方は地方票で入選数や受賞を奪ってこないといけない。

関西はもの凄く出品者が多いです、圧倒的に落選率も高いんです。そんな中で入選数を安定させないといけないので、今まで風景だった人が人物描くと多分審査の時に落とされる可能性があるから止めなさい、というようなアドバイスしてしまいがちです、長年ね。よっぽどの事が無い限り、その作者のやりたいという方向を応援出来ない。

新しい傾向の絵を出したいって言うてくれた人の出品を抑えてしまってる部分もある

山本 新しいチャレンジをしてもらいたいけれども、逆の話だよな。

弓手 コンクールってのは一発勝負、公募団体っていうのは長年その作者の制作を見守って、どういう方向へいけば大きくなるかを応援できる組織。そこが公募団体の一番の魅力です。僕らもそういう路線で今に至っているとしたら、問題点がどっちに解決されるかっていう答えは分かっているのに、反対の方へ行ってるってことがありますね。

山本 こっちとしては新しいチャレンジをしてもらいたいけれど

どま...
弓手 どなたか本部の先生が地方の研究会に来て、「こんな新しいことするの！これ、応援するよ」のひと言があったら。

さきや 一度招いてよ、誰か。
弓手 そういうことしたいです、地方ではね。例えば「地方の研究会へ東京の先生来てほしいよって言うてました」と提案すると、それだけで大きな反響になると思うんですよ。

さきや とところで新井さんの一水会とのナレソメが特別賞ですね。誰も知らない、先生も推薦しないようなところに出してきて百万円ゲットした。

新井 特別賞もらってその後会友になって三回目くらいに落とされた。その時やっぱり恨まなかった。かえって好きになったくらい。だから続いている。

新井 平成元年の改革の頃に居合わせた方は？
西 入りたてだったから、何もわからなかったのですが、高田誠先生が壇上で「会員が増えすぎた...、長年展覧会に出したから会員にするというのがきたりになつていたが...考え直そう」ってお話されたんです。どういふことなんだろうって思つて、51回展の目録を見た時に「委員」

がなくなつて、すごいなあって思つて...
さきや 改革前は会友はなく、長く入選を重ねると自動的に会員になつていた。

山本 そうすると会員が増えすぎて入選枠があまりに少なくなる。どうしても、既得権を持つている人たちが降格しないといけなかつたんだよね。恨まれても、改革するっていつたらそれしかなかつたんじゃないかな。

さきや あの改革でトータルすると百人くらいお辞めになつたと記憶していますね。だから一水会、かなり体力落としたんですよ。優秀な作家も失つたしね。一方で、しっかりした作家が残つてくれた。その後、事務所を小川先生方に置いて、当時の先生方が本当に力を合わせて立て直してきたんだよな。

山本 辛い思いした人いっぱいいるけど...そういう時期をくぐりぬけてできたこの会フラットなんだよね、私を感じるのね。私、出品する前に先生に見てもらつたの一度もないですね。先生達がちよつと見せるなんてこともなかつた。そういう人結構多いんじゃないの。

弓手 ここにいるメンバーは、あんまり誰々先生についてますってことじゃないっていう感じですね...ぼく自身も。

山本 アドバイス受けることは決して悪い事じゃないし、ただ、それが縛りになるってことがあれば問題なわけで。

新井 この会でどういうふうにやつていこうとか、希望とか、会への期待とか...ちよつと喋つて。

才村 作風が似かよつているのが逆にこの会のブランドになるのかなあつて思いますので、古い伝統も大事に、新たな試みも取り入れながら制作していきたいと思ひます。多様性のあることばかりで進めて行かれたら他の会との差がなくなり、一水会の魅力がなくなると思ひます。

山本 辛い思いした人いっぱいいるけど...そういう時期をくぐりぬけてできたこの会フラットなんだよね、私を感じるのね。私、出品する前に先生に見てもらつたの一度もないですね。先生達がちよつと見せるなんてこともなかつた。そういう人結構多いんじゃないの。



この人に注目
重石晃子先生

『深沢紅子野の花美術館』の館長を務められ、盛岡での一水会選抜展開催にもご尽力頂いた、重石晃子先生にお話を伺いました。

〈聞き手〉加曾利 光男
——深沢紅子先生との出会い
は？

私は生まれも育ちも盛岡なのですが、戦後、深沢省三、紅子ご夫妻が盛岡に疎開されて開いた、絵の教室に入ったのが出会いでした。

——一水会展初入選の頃

20回展からですが、その後二、三年出さない時期もありました。昭和三十年ごろ私も深沢先生夫妻もほぼ同時期に上京したんです。千葉の市川で小学校の教師した後、東京純心女子短大に二三年間勤めました。

——フランス留学のこと

40歳をいくつか過ぎた頃で



島山 正枝氏

ることによって、新たな刺激になって。だからこれからが楽しみ。

加曾利 僕、描いてるのが好きですね。そのほかのことはどうでもいいというか。

山本 加曾利さんの見てて今年どんなふうなが出てくるのかなって。期待っていうか持っているよね。

加曾利 あのカタチでいこうと思ってますけどね。だけど画論とかね、そういうこと一切興味なくて。

新井 そう言ってるけど結構真面目に考えてる。そこが見えるんです。

西 私が一番思ったのは、多くの先生達が一水会を盛り上げよう、どうしたら魅力のある会にするかっていう思いを持ってらして。個人が一生懸命やっていい絵が描ければいい。それは勿論そうなんだけど、この一水会をいいものにして、組織ばかりじゃなくて皆に分かってもらいたいという熱意を、すごく感じるんですね。

さきや 一人ひとりの一水会があるんですね、やはり一人ひとりが生きいきとやっていかないと盛り上げられない。これからも、も

近藤 地方には摩擦がある。その摩擦を何とかしようとして強い意志を持つてる人が地方には多い。都会には都会で刺激がたくさんあって、その刺激の中から生まれてくるものがある。皆の経験が「精鋭展」などでぶつか

つと話しあっていきましよう！今日は有難うございました。

初めての座談会でしたが、話題が『創作論』に触れるとたちまち持ち前の画論が飛び出してきて、大いに盛り上がる場面がひとしきり。しかし、残念ながら今回はそれらの部分は次の機会にさせて頂くことに致しました。そのあたりについては、また今後大いに語っていただきますよう！



第2回 一水会北海道出品者展

会期／2016年4月10日～16日 会場／北見文化センター

広大な北海道に点在するメンバーが、会期前日、数時間をかけて北見の地に結集。初日を前に、夕刻の懇親会で数か月ぶりの再会を喜び合いました。

今回は一人あたり100号以上と、20～50号各一点ずつで、迫力のある展示となりました。会期中時ならぬ春の嵐にも見舞われましたが、雪模様の中でも観客が途切れることなく、入場者は六日間で七百五十三名と盛会でした。広く北海道各地から足を運んでいただき、「一水会ってやっぱりすごいですね！」という声に励まされ、秋の本展にむけて一同決意を新たにしました。



(勝谷 明男記)

すけど、紅子先生に励まされて、三年間フランスに留学しました。大学の方は、恩人でもある舟越健次郎先生(彫刻家・舟越保武氏の実兄)が休職扱いにして、ポストを空けて待っていてくださいました。

野の花美術館館長時代

大学を退職してブラブラしていたら、『深沢紅子野の花美術館』ができて、二代目の館長を二期四年務めました。

館長時代に「花を描く展」を始めたんです。日美さんに盛岡まで来てもらって、展覧会作業のイロハを地元の業者に一週間特訓してもらいました。

好きな画家、影響を受けた画家

安井曾太郎。学生時代は、村上華岳の絵に夢中でした。

画家の姿が重なる絵が好きです。私自身は、出来るだけものを描かないで、その場の「空気を描くことを大切にしています。

.....

笑顔を絶やさず優しい語り口で丁寧にお話して下さいました。穏やかさの中にも画家として生きてこられた芯の強さを感じられました。

小川游作品館 オープン



日高山脈の頂にまだ雪が残る二〇一六年四月二十八日、北海道の六花亭中札内美術村に小川游先生の作品館が開館しました。オープンに先立ち、二十七日には前夜祭が開かれ、帯広市内の会場には二五〇名を超える方々が各地から集まりました。そして作品館のオーナーである六花亭の小田豊前社長が見守る中、館の設計者の美術村館長飯田郷介氏の祝辞に続き、小川先生からは、多勢の方の力により実現したことへの感謝のご挨拶がありました。銘板の文字を書かれた姪御さんも紹介され、笑顔あふれるお祝いの会となりました。

翌日はお天気に恵まれ、柏の森に佇む作品館の前でテープカットが行われました。一階には学生時代の自画像から、回想シリーズ、オリエントシリーズ、アトリエの室内を描いた作品群が展示されています。小川先生が、制作した時の事などを作品の前でお話し始めると、自然に人の輪ができて、和やかなギャラリートークの場となりました。中央の階段を二階に上がると、北海道シリーズの風景画が展示されています。多くの人が観賞する館内でしたが、そこには静かな詩情が広がっていました。

(西真里子記)

■六花亭中札内美術村
www.rokatakai.co.jp
■アクセス／北海道とかち帯広空港からは車で約十分。JR帯広駅西口からは十勝バスで六花亭中札内美術村下車。



第2回 一水会人物デッサン講座 2016年5月7日(土)～8日(日) 会場/一水会アトリエ(埼玉県川口市)



第2回目の人物デッサン講座は、小川游、寺井力三郎、山名将夫、玉虫良次、山本耕造の五先生を講師にお迎えして、二日間(八日午後は合評会)開講。受講者三名の中には遠方より泊りがけで参加した人も。玉虫先生の美大生時代の裸婦デッサン五点も展示。ポーズの合間には先生方が「デッサン談義」を交わされ、参加者は「観て聴いて描く」なかで、それぞれの感性を磨きました。完成作は、背景を、見えたとおりに描く、低明度で塗りつぶす、紙の白地をそのまま生かす、の三様になりましたが、人体各部の精妙な起伏を眼で追い、明暗の諧調に置き換えて量感と空間を描き出すことは、ジャンルを超えて各人の制作に生かされることでしょう。

(新井隆記)

久保田辰男絵画展 ■ ふるさと・牛歩の50年 ■

油彩(主に大作)65点 スケッチなど15点 ※図録を同時発刊の予定です

会場/広島県立美術館 県民ギャラリー第4～5展示室(広島市中区上幟町2-22)

日程/2017年3月28日(火)～4月2日(日)
9:00～17:00 ただし、3月31日(金)は、9:00～19:00



第30回記念展出品者の皆さん

2016年7月15日(金)～20日(水)
会場/山形県芸文美術館

第30回記念 尺水会展

せきすいかい

尺水会展は節目の第30回記念展を迎えました。真下慶治先生によつて結成された尺水会は、研修会と会員展の開催を通し、一水会展出品を続ける山形県内のグループです。会場に会員十一名、招待一名の100号を中心に三四点を展示。事前に作品紹介冊子を作成し、それを基にした会員全員

によるギャラリートークも好評で、会期中七〇四名の来場者で賑わいました。会場内に「一水会と尺水会 双方の沿革を示し、会員による批評会も実施しました。

今後は会員増を図りながら、より活発な活動を目指そうと、会員一同決意を新たにしました。

(遠藤博政記)

あのころこれから

越智節昇先生訪問インタビュー

聞き手／新井・さきや

—東村山からこちら(愛媛県四国中央市土居町)へ戻られたのは何年でしたか？

平成九年。

—伺う途中、石鎚山は雲で隠れて、見えませんでした。見える日は少ないそうですね。

そうですね。

—お兄さんは越智宗茂先生、51回展まで出品されてましたね。

宗茂先生も、とても魅力的な絵を描いておられますが。

愛媛師範学校つていう、教員になる学校が松山にあつたんですよ。兄はそこを出て教員になって、戦後すぐ一水会展に出品したんですね。それで僕も一水会へ出すようになって。絵を描いてるのをよく見てたからねえ。二階に描いてあるのを、ちよ



ころは新居浜に。

—それから先生は上京されて第三師範学校(現・東京学芸大学教育学部)へ。

絵を描くなら、教員しながらなんとか生活ができるようになるから、師範学校行けば良いだろうと。

—篠原昭登先生も戦後まもなく第三師範を卒業されたと…。

篠原先生は第三師範の二年ぐらい先輩なんです。田崎廣助先生の研究会に行つてたからね、同じ池袋からの線で篠原先生は「石神井公園」で、僕はずつと奥のほうやったからね、同じ線で行ったから、田崎先生の教室へ、行き帰りは一緒に行動していたわけで。それで信州の方にも連れて行つてもらつて、八ヶ岳を写生するようになったんですよ。

—学芸大学を卒業されたからは、教員になられたのですか？

東京の北区の王子第五小学校かな。それで準備室が使えたものですからね、そこで絵が描けると思つたですね。

—卒業されて二年後には一水会

展に出品された。

僕が一水会に出すのは15回展が初めてで、14回展には学校の保健室の戸棚みたいなのを描いて、それが駄目で15回展の時に教会の入り口のところに描いた。

—ニコライ堂で初入選。

ええ。教会の一隅、ニコライ堂の入口のところで。あのときは30号を三点くらい出しよつたんです。

—そのころは創立会員の先生方もご存命で。

そうだったね。大体写真で覚えてるからね、直接は声をかけるわけには行きませんでした。離れて「ああ、あの先生だ」なんて。高田先生もよく話してただけ、安井先生は何にも言わないんだつてね。じつと観てるだけだつて。そうするとね、高田先生の方は観られてるだけでその時に自分の絵が解つてきたりして。



「素描」越智宗茂先生作



— 27回展で佳作賞を。このころは工場を描かれてますね。赤羽あたりですか？

そうですね。東京北区の赤羽の川つぶちで、埼玉に近いところですよ。田崎先生のところ(東京都練馬区桜台)で『廣稜会』という作品の研究会をやつてたんですよ。描いた絵を持って行って、何人も居る中でお互いに批評し合うんですね。

— それを田崎先生がお聞きになつて居るのですか？

そうですね。褒められることはなかつたけど、長い間に一遍か二遍、「今のは大変よろしかった」なんていう程度ですね。

— 創立会員と直接お話をしよう

な機会はおありでしたか？

無かつたです。中村善策先生とかはね、背景のところ日本画のような屏風みたいにしようと思つて、ちよつと線なんか入れたら、「これは何だ、お前！」って注意されたことがあつた。

— 教員生活をされながら大きな絵を描くのは大変だったのでは？

大変だったよな。四畳半くらいの部屋で二階から降ろすの、ベランダから降ろすの大変だったよ。

— 36回展では会員優賞。その三年後には地元の美術館で大きな個展をなさいましたね。

ええ、愛媛県立美術館で。

— 会員優賞の作品は「闘牛」ですか。

南の方(南予)に段々畑があるからそちらの方に取材に行つて、宇和島の近くに神社があつて。その奥に闘牛場があつてぶらついていたら、たまたまお祭りの時期で牛に出会つて。

— 闘牛をしていたのでですね。初めてご覧になつたのですか？

ええ。それから牛を飼つている飼主の所へ行つて、スケッチさせてもらつて毎年二〜三回行つてね、そのひとのお世話になつて何回も見させてもらつて。

— みかんの段々畑を描きに行かれたのが、たまたま出会つた牛に惹かれていつた。親しくされていた牛飼いさんの牛は強かつたのですか？

体が小さいんだけども粘るのが居つたね。飼主は大体、闘牛専門に飼育して、山へ登らせたり土手に突っ込ませたりして鍛えてね。

— ランクがあるのですか？

小結程度から始まつて闘脇、大闘牛になつて、横綱は大きくて体重も一トン近くある。

— 牛と少年を描かれてますが。

少年は、飼主の所の子供がおつたものだからつい…。ちよつ



とやんちゃん子で。

— この子はその後牛飼いに？

やつているようですね。

— 「激闘四十分(テッサン)」、四十分も闘うのですか！ これらの

スケッチをもとに画面に構成をされるのですか？

スケッチはその場の雰囲気

ちゃんと掴むだけのこと。牛

は普段本当に静かですよ。牛

小屋も納屋みたいなところがあ

つて、一頭ずつ同じ部屋に入れ

られて、時々外に出しては大きな木のところに繋いで、飼主



がちよつと歩かせたりなんかしてね。

—闘牛を二十五年以上描かれたのですか？

—そう、四十年ぐらいいは関わってたね。

—各地の闘牛をご覧になったの

—でしょうか。

—いや、遠くから牛が来る。山の

—陰の隠岐の島、沖繩の近くの島とかね。闘いの内容もちよつと違

—つてきてるような気がしてね、なんだかんだとヤジ飛ばしながら

—ら見てる人がおったですよ。

—宇和島のやり方とは違うと？

—うん。

—《壁に掛けられた書》を見て

—津田青楓せいふうですね。お知り合いだったのですか？

—いや、あのね、安井先生の好きな言葉で「運、鈍、根」って。それで展覧会で分けてもらったんですよ。

—一九九七年に土居町に帰郷されてからは石鎚山に本格的に向

—かわれているかと思いますが、来てみて分かりましたけど、急

—峻な山塊が続いて、稜線は牛の背のようですね。この山の魅力

—はどんなところでしょうか？

—山岳信仰、信仰の山です。

——修験者が登る祭りがありますね。

——そうそう神社がね、神社があつてそこからまた登っていく。

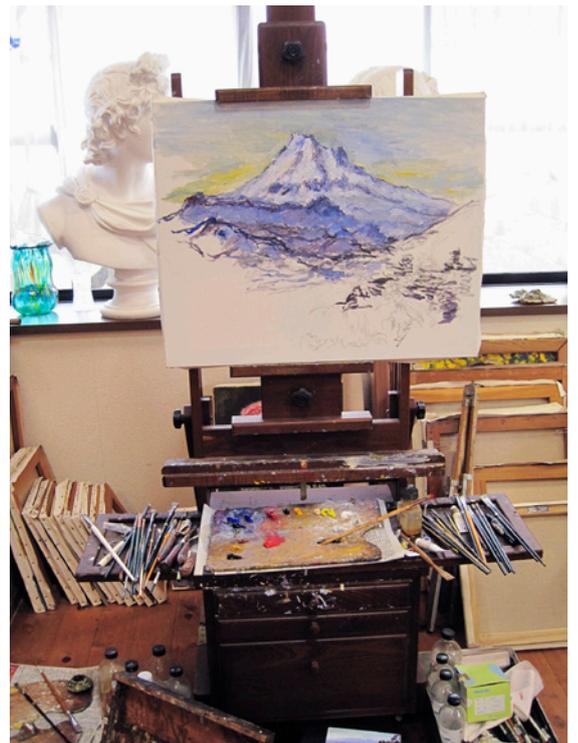
——春先になると峰にツツジが咲きますね。

——ええ。アケボノツツジ。雄大な景観がお好きなようですね。

——そこに山小屋があつてね、その主人に泊めてもらって。

——今描かれているのは冬のお山ですか？ スケッチに行かれたのですね。

——うん、富士。山梨県の大月



——というところから富士山の見えるところへ連れて行ってもらったんだけど、もう途中で終わって。僕は車の運転ができないものだからね。

——今年ことしの四国一水会展しこくいちすいけい（高知県立美術館）はいかがでしたか？

——お客さんが沢山見えたと同つてありますが。

——正月の四日に搬入して五日から十一日までの一週間です。正月だから人が少ないかと思つたら、割と来てくれてね。二千六

——百人くらいは見に来てくれたと聞きました。四国からは十五人

——出品、広島から久保田辰男さんと木村毅さんが出品してくれて

——ね、130号の絵運んでくれて。

—「県民ギャラリー」といって面積広がったから六十点近く並んでよく飾れました。

—見応えがありましたね。四国一水会は今、愛媛と高知の作家

—が中心だと思えますが。

——そうですね。香川と徳島はまあ一人くらいずつ出してたけど

——ね、人数が居なかつて。これからどういう風になりますか。白

——日会とか東光会に出品してる人も出すようになってね、ちよつと

——人数増えましたね。他団体から移つたわけですね、一水会に。

——ええ。これから四国の一水会はどのような形で発展していったら

いとお考えですか？

今度は、新しくできた美術館（新居浜美術館）でやることになつてゐるんです。その市民ギャラリーは高知県の美術館よりもっと広いから沢山並べられるだろうと思います。

—規模が大きくなって行くので
すね。

はい。

—越智先生は六十年以上にわたり一水会に貢献されていますが、今の一水会、これからの一水会に期待されることなど、お聞かせ下さい。実景を前にしてその感動を写生することは大事だと思えますが。

それはもちろんだけど、もっとやっぱり新しい理解を、新鮮な表現がもっと出たらなあと思えますね。

—写真絵画にも表現の幅があつても良いと。

何かもつと新しい、自分の思いを込めて、ねえ。実景だけじゃなくて。

—もつと内面、作者なりの解釈を。

うん。

—今、富士山を制作されていますが、先生ご自身これからどんな形で仕事に取り組まれるの

か、抱負などお聞かせ下さい。闘牛は今後も描かれますか？

取材を続けてもつと構成的に迫力のある絵が描きたいと思つてゐる、ねえ。

—石鎚山はこれからもスケッチされて。

そうですね。

—富士山は新たなモチーフですか？

山梨県に梅野輝明さんという人がおつて、運転が上手だから、また富士の見える所へ、方々へ連れていつてもらつてスケッチしながら、やっぱり日本を代表する山だということをね、ちょっと描いてみたいと思つてゐる。

—沢山のお作品を前に、長時間にわたりお話し下さいまして、本当に有難うございました。

以上「あのころこれから」

二〇一六年二月十七日

愛媛県四国中央市土居町

越智先生宅アトリエにて取材



25～26歳の頃の自画像

短 信

外処旭さん
画集出版
記念パーティ

八月二十日（土）高崎メトロポリタンホテルにて一水会委員、外処旭さんの画集「画業六十年」出版記念を祝う会が開催された。

これは外処さんの傘寿を祝うとともに画集の出版記念のパーティで当会発起人の国会議員諸先生をはじめ関係者二百九十二人が参加し盛大に行われた。来賓代表として一水会代表小川游先生が「今後も上州人の気骨を貫き通してほしい。」との祝辞を述べられた。

出版記念を祝う会
（関口昭夫記）



第14回 一水会精鋭展 会期:2017年3月13日(月)～19日(日) ※今回より優秀作品には賞を贈る
会場:東京銀座画廊・美術館

出品 予 定 作 家	会沢 文朗 牛込久美子 北村 春美 小松 正弘 相馬 順子 戸苅 武宏 畠山 正枝 三輪由紀子	青木 年広 岡山 豊樹 木村 毅 近藤 孝子 高橋よう子 外山 順子 浜崎 千尋 村上 選	青柳由紀子 大嶋 尚美 久世 夢二 斎藤 忠臣 滝沢美恵子 中田 基宏 林 洋一 森 恵美子	浅野 和喜 大野 文子 久保 直樹 斎藤由美子 田中久実子 長岡 正勝 平井 芳夫 森 敬介	浅見 文紀 小笠原あい子 久保 博孝 才村 啓 田中 敏雄 中澤 嘉文 中島 和長 保坂 晶 山崎 保	安達久美子 小沼 秀夫 久保 慶議 芝 教純 田村 公男 中島 和長 保坂 晶 山崎 保	新井 隆 鍵主 恭夫 久保多貞夫 下川 昭一 城 真知子 土田佳代子 中山 一昭 間瀬 徹 弓手 研平	荒蒔 邦弘 加曾利光男 栗原 高光 城 真知子 土田佳代子 中山 一昭 間瀬 徹 弓手 研平	石黒 郁美 金井美智子 児島 真澄 神宮紀勢子 寺井 義夫 中山 孝美 松澤 泉次 李 志宏	伊藤 尚尋 河石 正義 後藤 邦夫 鈴木 喜博 寺岡 克三 西 真里子 宮島百合子 若林 治良
------------------------	--	--	---	---	---	---	---	---	---	--

第56回 一水会選抜展 会期:2017年3月15日(水)～21日(火)
会場:日本橋三越本店 本館6階・美術特選画廊

出品 予 定 作 家	小川 游 久保田辰男 山本 耕造 平井 利明 河西 昭治 大野 文子 伊藤 尚尋	寺井力三郎 武藤 初雄 廣畑 正剛 弓手 研平 斎藤由美子 木村 毅 中村 哲泰	吉野谷幸重 佐藤 道雄 山田 正博 宇野のり子 相馬 順子 久保 博孝 松澤 泉次	吉崎 道治 篠原 昭登 丹羽 章 竹内 徹 滝沢美恵子 鈴木 喜博 山下 審也	田中 義昭 山名 將夫 齊藤 蕙子 新井 隆 中澤 嘉文 戸苅 武宏 森 恵美子	越智 節昇 田島 健次 稲原 吉男 岡野 信子 西 真里子 森川 定男 久保多貞夫	浅見 嘉正 玉虫 良次 池田 清明 小沼 秀夫 村上 選 山本 佳子 中島 和長	辰巳 文一 鈴木 順一 一の瀬 洋 浅見 文紀 重石 晃子 森 敬介 須貝 昌春	鈴木 益躬 山本 勇 一の瀬 洋 勝谷 明男 荒蒔 邦弘 須貝 昌春	さきやあきら 小泉 元生 杉森文観明 茅野 吉孝 梅村 徹 安達久美子
------------------------	--	--	---	---	--	---	--	--	---	--

一水会事務局だより

第78回展の来場者は約一万七千人を数えました。昨年より会期が二日少なかったにもかかわらず、連日多くの方々に作品を見ていただくことができました。

今回の一水会展において委員に十八名、会員に十五名の方が推挙され、新しく設けられた準会員に三九名が推挙となりました。いよいよ第79回一水会展からロビー階の展示室四棟全部を使つての展示になります。陳列作品数の増加が見込めるとは思いますが、二段掛けを出来るだけ少なくして見易い展示を目指し充実を図りますので、皆様には奮起して制作に取り組んで頂きたいと願っております。

●巡回展の展に出よう

現在、公募規定では大阪、名古屋、金沢の巡回展には、委員・受賞者・巡回地域からの入選作品が展示されると謳っていますが、会場の広さの関係で、展示できる作品数が決まっております、会員以上までしか展示できないのが実情です。巡回地域

からの入選にも拘わらず、作品が展示されないで疑問や不満をお持ちの方もおられるかと思いますがどうかご理解をお願いします。

●事務局の交代について

事務局長に山本が就任して五年になり交代の時期がやってきました。この間、事務局スタッフ(さきや、玉虫、西)の協力体制の中で気持ち良く働かせていただき、会員の皆様方には多大なご協力を頂きました。多くの温かい支えにより任期を終えられますことを心よりお礼申し上げます。



今年の総会(十二月)を区切りに玉虫良次氏にバトンを渡しますが、今後とも事務局に一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(山本耕造記)

最近の動静

- 【死去】横内襄(会員)、土屋摩左代(会友)
- 【退会】張益学(会員)、松岡貞子(会員)、谷合浩典(会友)

日展審査を終えて



近年一水会から日展に出品する人数は減少傾向ですが、それでも今年九十余名の人が出品しました。その中で入選は五十名で、少人数ながら入選率は各会派の中で一番高いと思われます。また、一水会の絵は丁寧な作画とレベルの高さで定評があります。他の審査員から度々その声を聞きました。今回審査に臨み、多くの絵の中にあつて一水会の絵の質の良さを認識しました。それは先人が伝えてきた画品でしょうか。(身びいきがもしれませんが。)

2017年の展覧会スケジュール

- 第56回選抜展
三月十五日～二日
於/日本橋三越
運営委員・常任委員と選抜された委員、会員、会友、一般入選者が出品。
【第14回一水会精鋭展】
三月十三日～十九日
於/メルサ七階
東京銀座画廊・美術館
【第78回一水会展】にて八十名が選出されました。50号の作品を展示。14
回展より、優秀な作品に賞を贈ることになりました。
- 盛岡展
三月二十六日～四月十二日
於/深沢紅子野の花美術館
【第56回選抜展】より、運営委員、常任委員に加え、会場で選抜された作品。
- 第79回一水会展
九月十八日～十月三日
於/東京都美術館

一水会の絵が出てくる度に懸命に描かれた皆様の顔を思い出しました。一人でも多くの人に入ってもらいたいと努めながら、自分が一水会の人間だということをつくづく感じました。惜しくも選外となってしまう人にも申し訳ないことですが、捲土重来、また挑戦していただきたく思います。日展の中でも伝統ある一水会の存在をアピールし守つていかなければなりません。それが私を育ててくれた一水会への恩返しと思っています。

さて多くの入選者の中で、今年一水会から特選に選ばれたのは才村啓さんです。作品は卓上静物で極めてオーソドックスな姿勢で写生した、いわゆる一水会の伝統を引き継いだ絵です。今回の受賞を励みにさらなる精進を期待します。(池田清明記)



卓上静物 才村 啓

還暦を迎える方、チャレンジ!

中札内美術村 企画公募展『還暦の自画像』

■応募資格/1956年1月1日～1958年12月31日に生まれた方

■出品料/5,000円 ■サイズ/10号F・額装不要 ■受付期間/2017年3月1日～3月31日(必着) ■賞/最優秀賞60万円(1名)ほか

■お問い合わせ/六花亭製菓株式会社「還暦の自画像」公募展事務局

TEL:0155-37-6666 Fax:0155-37-6750 メールアドレス:fukinoto6@mint.hokkai.net